

559.5-0667



空機増産

大西瀧治郎述  
血闘の frontline に 應へん

559.5  
66

×  
複写



始



朝日新聞新輯

973

170

# 航空機増産

血闘の線に應へん

航空兵器總局總務局長

海軍中將西瀧治郎述



2

559.5  
0.66

# 航空機増産

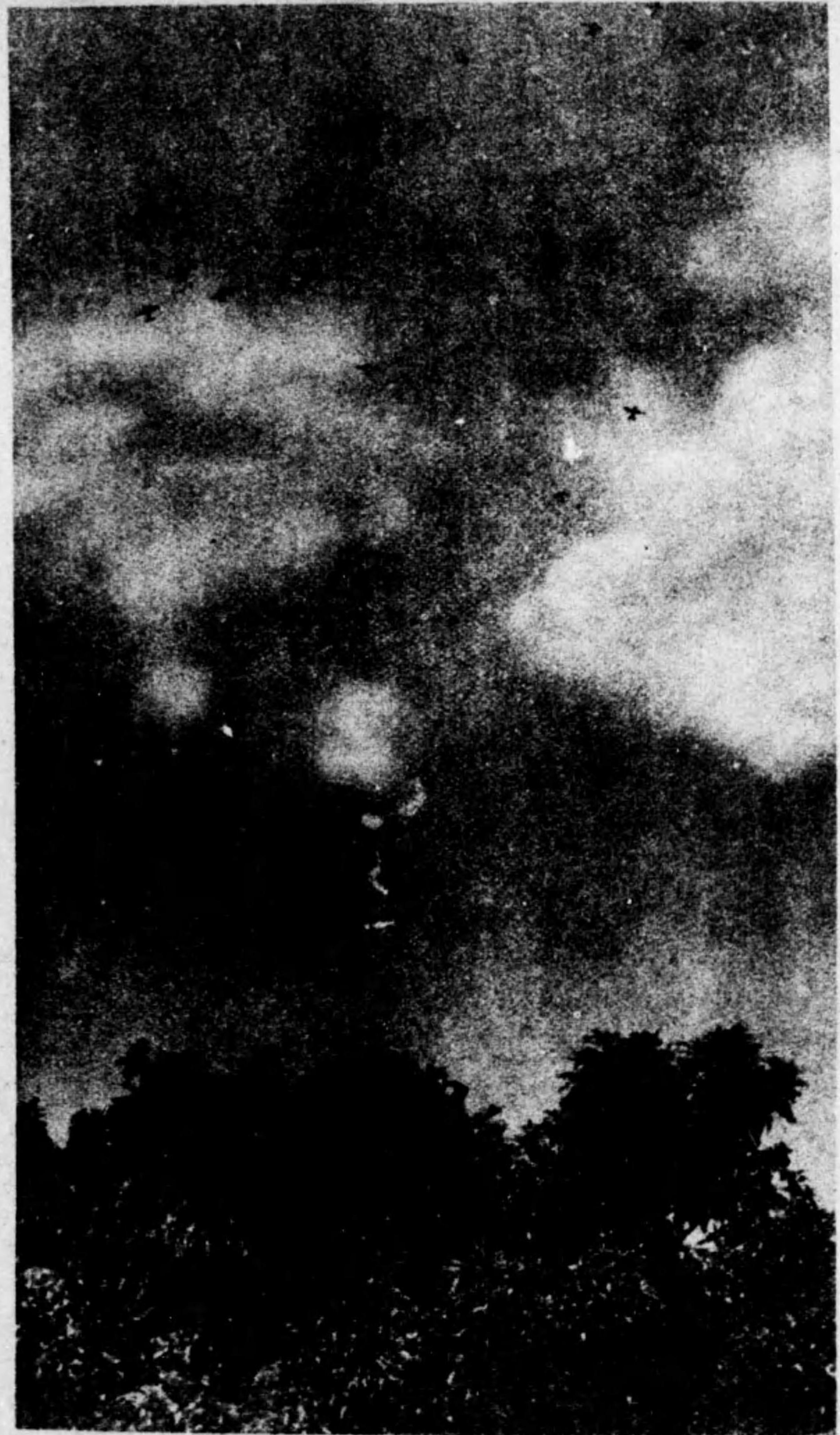
— 血闘の frontline に應へん —

航空兵器總局總務局長  
海軍中將 大西瀧治郎

朝日新聞社發行



ラバウル上空で我が空軍の邀撃にあひ編隊を亂して撃墜される敵機（上方の小型機が我が戦闘機）





# 朝日時局新輯

## 本輯發行の趣旨

世界は今や有史以來空前ともいふべき大戦と激動の最中にある。今日の一日一ヶ月は過去の歴史中の十年にも一世紀にも匹敵する變轉を續けてゐる。かうした異常極まりなき時機において最も大切なことは、矢繼早に起きつゝある内外百般の出来事の中で、その主流的な題目につき正確な知識と認識を持つことである。これを持たずして、この時局とわが日本がどの方面に進展しつゝあるかを知ることは出来ない。

本輯は右の趣旨に基き、世局の進展に伴ひ隨時發行するものであつて、その特色は、各題目につき實力ある筆者が、出来るだけ簡明平易に書き、懇切にして權威的な解説書たらんとする所にある。

973  
170

## 目次

### 航空機増産

勝利の鍵は航空機にあり……………一

航空機を増産せよ……………五

航空兵力とは何か……………六

可能を可能とす……………九

航空機工業の本質……………一

航空機工業の推進と日本人……………一三

今こそ元寇の秋……………一五

航空機増産に參與する道……………一七

指導者に懇へる……………一九

關係者の猛省と自覺を望む……………二一

この實例を見よ……………二五

女子も奮起せよ……………二八

結語……………三〇

太平洋空戦の實情

断じて撃權し得る信念……………○○海軍大佐（談）……………三四

敵の物量に迷惘する精神力……………三四

執拗なる敵の侵攻企圖……………三六

航空戦力の意義……………三八

機械力の數で我と對等……………三九

ラバウルを阻ふ強引作戦の意味……………四一

空戦力の優劣こそ勝敗の分岐……………○○海軍主計大尉（談）……………四四

ソロモン群島の特殊性……………四四

敵の局地制空……………四五

學ぶべき敵の基地設營法……………四七

優秀を誇る我戦闘機……………四九

反攻企圖にみる敵の自惚……………五一

近代航空戦の典型……………五三

眞珠灣の仇討と呼號……………五五

鐵壁のラバウル、逞しき將兵の意氣……………五七

精魂を盡して難局を突破せん……………五九

本書掲載の寫眞はいづれも陸軍省檢閲濟並に海軍省許可濟第四六七號

勝利の鍵は航空機にあり

皇國の運命を決するこの大東亞戦争に、われわれは石に嚙りついても勝たなければならない。そしてまた國民全部が眞にその氣になつて、死物狂ひに努力するならば、そこには必ず光輝ある勝利が齎されるのは明らかであるといふはつきりした自信ももつてゐる。この必勝の決意のもとに、死物狂ひの努力を傾けなくてはならないことは多いが、その中でも最も大切なことは航空兵力の擴充であり、航空機の増産である。

昭和十六年十二月八日、大東亞戦争開始以來僅々半年にして日本は大東亞共榮圈内を裁定し、廣大な資源地域をいち早く獲得して、長期戦に即應するための所要の措置を物の見事に完成した。この間に於いて海方面で擧げられた輝かしい戦果の直接の手段が主として航空機による攻撃であつたことは、今さら説明するまでもないことであると思ふ。まづハワイ攻撃、マレー沖海戦、その他の海方面作戦の實戦において海上作戦における主力は航空兵力であることを實證して舊式な戦術家を驚倒せしめたのである。フィリピン、マライ、蘭印のかの廣大なる地域を占領するに當つては、海戦兵力および陸戦兵力の善

戰鬪によるところが極めて大なるものがあつたことは勿論であるが、しかしこの事業をかくも迅速且つかくも順調に完遂し得たのは、航空兵力において日本が壓倒的優勢であつたのが根本の原因である。即ち日本は迅速に制空権を我が手に收め、これを常にわが方の手に掌握してをつたために外ならない。

昭和十七年中期以來、敵はソロモン、ニューギニア方面に對し優勢なる航空兵力をもつて反攻し來り引續いてギルバート諸島からマーシャルなど我が内南洋方面まで反攻の手をのぼしてゐるが、この飛石作戦は決して米英の發明といふのではなく、わが國が戰爭の初期においてすでに執つて來た方式の反復であり、わが軍が大股ではやく飛石傳ひに歩いたのに對し、敵は一年半がかりで小刻みに三つまたは四つ歩いたに過ぎないのである。尤も最近の戰況を見ると、敵もこの步調を非常に速めて來てゐるが、かつて緒戦において日本が進み取つたあの迅速さに比べれば決して速いとは言へない。これはわが軍が多年にわたる猛訓練と研究の結果を極度に發揮して、航空の威力を百パーセントに利用したためであつて、これによつて世界戰史に比類なき戰果を擧げて、海上作戰の方式に一大轉換を招來せしめたのである。この間に海方面作戰において航空の威力がいかに絶大であつたかは、實に、かつて航空萬能論者またはこれに近い思想の持主であるとしてむしろ各方面から危険人物視されてゐた人達までが、まさかこれほどの戰果が上るであらうとは豫想しなかつた位の絶大な威力であつたのである。

ところが一昨年半ば以降、敵米國の戰備漸く充實し、老大な兵力を以て南東ならびに北東方面の失地

の奪還を企圖し、執拗に反撃して來るやうになつてからは、わが空海陸の諸兵力が擧つて大なる戰果を擧げてはゐるものの、大局的に見れば遺憾ながら押されてゐるといはずを得ない狀況になつて來たのである。大體、非常に勇ましい挿話が澤山あるやうなのは決して戦がうまく行つてゐないことを證明してゐるやうなものなのである。例へば足利、北條が楠木正成に對して事實は勝つた場合の如きがそれである。あの場合、足利や北條の方には目ざましい武勇傳なり、挿話なりといふものはなくて、却つて楠木方に後世に傳はる數多い悲壯な武勇傳がある。だから、勇ましい新聞種が澤山出來るといふことは戦局からいつて決して喜ぶべきことではない。この大東亞戰爭でもはじめ戦ひが非常にうまく行つてゐた時には個人々々を採り上げて武勇傳にするやうなことは現在に比べるとズツと數は少かつた。いまはそれだけ戦が順調でない證據だともいへるのである。

狀況かくの如くなつた原因は、航空兵力が殘念ながら量において甚だしい劣勢にあり、制空權が多くの場合敵の手にあるがためである。

わが軍は戰爭の初期において堂々航空で勝ち、いまはまた航空の劣勢に悩んでゐるといふことは、如何にしても蔽ひ難い事實なのである。

制空權を有せずして制海權なく、また制空制海權なき孤島の戰鬪が如何に困難であるかといふことは素人でも容易に想像が出來ることであらう。ガダルカナル、レンドバ、ギルバート、マーシャル、アツ

ツ、キスカの諸島から涙をのんでわが軍が引き、或は全軍が玉碎したのは、實に寡少なる航空兵力を以てする場合全く止むなき萬全の措置であり、或はやむを得ない結果であつたのである。山本元帥の戦死せられたのも、結局はまた航空兵力の劣勢に基因するといつても差支へないと思はれる。現在、一番問題になつてゐるラバウル、あれは新聞で御覽になる通り、毎日百機、二百機、三百機といふやうな莫大量の飛行機が、しかも日に數回に互つてやつて來てゐる。それに對して、こちらは兎に角寡勢を以て、意氣と質の優良を以て敵に對抗してをつたのであるが、近頃ではこの反撃の力も大分弱つたやうに思はれる。この航空戦で勝つか負けるかによつて海上方面、惹いては陸上方面の勝敗が決する。つまり制空權の濃厚の方が、制海權を得るからなのである。一度こちらの航空勢力が弱つて來れば、まづあの附近一帯の制空權が敵の手に落ち、次いで海上交通が杜絶し、あの方面に對する陸上兵力への補給が出來なくなり、この結果、既に従來例があるやうな、實に悲惨なことになる懼れが深い。

航空兵力の劣勢は實にかくの如き重大なる結果を齎すものであることを、我々は銘記して置かなくてはならない。

## 航空機を増産せよ

われわれは敵の反撃に備へ、大東亞共榮圈の周圍に對しては常に警戒監視を嚴重にして、敵がもし來攻する場合には、これに甚大なる損害を與へてその企圖を完全に挫折せしめることが絶対必要である。しかも敵が何れの方面から攻撃して來るにしても、これに對抗するために最も必要なのは航空兵力でありまた攻勢作戰を取る場合第一に必要なものも、これまた航空兵力であることは言を俟たないところである。およそ戦争に航空機が重要だといふことは近來極めて常識化してゐるので、以上述べたことも恐らくは判り切つた話であり、むしろ不要の感がないでもないと思ふが、しかしただ漫然と重要だと考へる一般世間の認識では、現下の決戦段階において、甚だ不十分であり不徹底であるので、以下しばらくその内容について具體的な事實を拾ひあげ、航空決戦に處する心構へを固めたい。

まづ、わが方の飛行機の損害は大本營の發表にもある通り、敵に比べて常に確實に少い。これはわが飛行機搭乗員の精神力が卓越してをること、戦闘技術が優秀であること、また飛行機自體が質において優れ、精良であることを物語るものである。

このやうにわが方の損害は敵の損害に比しては僅少であるが、絶対量としては決して小さいものではなく相當に大きい。大本營の発表を見る際、特に注意を要することは、わが方の発表の数字が敵と直接交戦の結果生じた損害のみを示してをることである。即ち、発表の数字では自爆と未歸還の機数だけを示してゐる。然しこの数字のほかに、直接交戦以外の作戦行動、作業中ならびに教育訓練等に當つて消耗する航空機は、一般國民の想像以上に大なる數にのぼる。つまり交戦中の被弾によつて、たとひ無事に基地まで歸投しても使用不可能となるもの、前線の不完全な基地で離着陸に當つて損傷をうけ使用不能となるもの、その他消耗する機数は實に莫大なる數字にのぼる事實を認識しなくてはならない。

航空兵力の増強のためには、教育用にもまた作戦用にも、極めて多くの航空機を必要とするのであつて、航空機増産の緊急且つ重要なことは、この夥しい消耗性からしても、また航空兵力の畫期的増強の必要からしてもいよ／＼一層強く感ぜられるのである。

## 航空兵力とは何か

われわれは常々航空兵力と一口に簡単にいふのであるが、これを現實に形成する要素は極めて廣範圍

にわたつてゐる。

航空兵力とは普通搭乗員と飛行機とを指していふのであるが、これ以外の要素にも決して輕視出來な



祖國の期待に副ふべく米英撃滅に豫備學生の猛訓練

いものが極めて多い。

例へば航空燃料、爆彈、魚雷、機銃、彈等の消耗兵器、ならびに航空基地に關する一切の施設用具と、これが操作に



要する各種の要員等であつて、どの一つが缺けても飛行機は戦力を發揮することが出来ないのはいふまでもないところである。

そこで、先づ航空兵力の二大要素である搭乗員と飛行機について、なほ少し詳しく説明を加へて見る。

航空兵力の大なる消耗性ならびにこれが劃期的増強からいつて、搭乗員の大量養成が緊要であることは今さら説明を要しないところであつて、これには要員の獲得とこれが教育訓練とが問題である。そのうち要員に關しては現在誠に喜ぶべき状況にあることは、昨年来陸軍ならびに海軍において一般學生より航空機搭乗員を大々的に募集し、非常なる好成績を見たことでもよくわかつて思ふ。

戦争が熾烈の度を加へるに従つて、青年層の愛國心は燃え、一死報國の熱血は沸つて來た。日本人は熱しやすくまたさめ易いといふことは誠に當らない戯言であることを、今にして知るべきである。

次に搭乗員の教育訓練であるが、これに要する施設機材關係、要員の點から見ても、また相當鍊度の高い者を養成しなければ徒らに數だけ揃へても不利であることを考へても、大量養成には大なる困難を伴ふものであることが想像し得られると思ふ。

しかし現在着々萬難を排してこれが實現に進みつつあり、また教育を受けつつある者は「山本元帥に續かん」との決意固く、すでに死生を超越し、ただ君國のために戦はんの一念に徹してゐる。私共は

この實況を見、その眞情を汲んで、誠に頭が下り目頭のあつくなる思ひがするのである。

かくて搭乗者の問題に關しては全國青年の熱誠が着々とこれを解決しつつあるが、次は航空機自體の増産である。航空機自體の増産が抄々しく進捗せざる限り、これが航空兵力増強上の最大隘路であることは申すまでもない。

## 可能を可能とする

今や航空機増産の聲は軍部、政府、都市工場地帯はもとより、山間僻地津々浦々にまで響きわたつて昭和十九年においては國を擧げて航空機大増産の一色に塗り潰されんとしてゐる。われわれ航空機生産に關する中央行政に携はる者として、誠に感謝に堪へない次第であつて、第一線で日夜敵撃滅に心魂を砕く將兵に對しても、これで少しは申譯が立つものと思はれて私らは喜ばしく感じてゐる次第なのである。

實はわれわれは昨年末以來近き將來におけるわが國力を各方面より慎重仔細に検討してをつたのであるが、先般昭和十九年度、すなはち昭和二十年三月末日までの期間における航空機生産の豫定を確定した。その數字は、今ここで明示することを差控へるが、相當老大な數にのぼるものであつて、これが實

現する曉あかつきにおいては、過去一ヶ年半の間苦しみ抜いて來た戦争の大局を一舉に挽回し、攻防その立場をかへるが如き状態になし得る見込みが十分だったのである。

しかも、この豫定を實現することは決して不可能なことではなく、近來の流行語である「不可能を可能とする」程度のもではなく、「可能を可能とする」程度のものである。とはいへ、これが容易なる事業であるといふことは決して出来ない。

これがためには、航空機産業は勿論のこと、その基礎となる各種産業、勞務、運輸、食糧などの各部門にわたり、また一見航空機生産とは全く無關係なやうに思はれる一般民衆までが眞に死物狂ひになつて、はじめて實現させることが出来るといふ程度のものであることを、ここで十分諒解して置いていただきたいと思ふのである。

しかし、この邊の事情に關してはまだ一般に理解が足りないやうに思はれるので、念のため航空機工業の本質について以下若干の説明を加へて見よう。

## 航空機工業の本質

一般に航空機工業といへば單に機體、發動機を聯想するが、機體と發動機だけで航空機の運用が可能となり、直ちに移して作戦に使用出来るものではないのである。

機銃、電信機、諸計器、爆彈、魚雷、機雷、照準機、各種光學兵器、電波兵器など一切の部品を完備し、さらに燃料補給車、爆彈魚雷運搬車その他の車輛兵器、飛行場設定機材、その他一切の基地兵器を整備して、はじめて航空兵力としての力を發揮し得べきことは先に申述べた通りである。したがつて、航空關係會社といへばわれわれは直ちに中島とか三菱のやうな著名航空機會社を聯想するのであるが、一機を完成するためにも、部品製作を擔當する多數の協力工場が完全に機能を發揮しなければ決して用をなさないのである。

さらに、もつと必要なことは、一般に眼につき易いこれら製品を製作する工場よりも、目下特に重要性の大きいのは素材工業の方面であつて、工作機械、産業機械、電氣機械の製造部門、あるひは工具研磨材などの製造部門から、さらに無数の品種に及ぶ化學工業製品の如きも、その何れを缺いても、完璧

の生産に支障があるといふことを十分に諒解せねばならぬ。

例へば、これからの航空機生産上の主要な決定要素は、素材工業の加工能力如何に存するのである。然るにこの素材をつくる工場、あるひは素材を加工する産業機械をつくる工場に對しての重要性が兎角閑却せられるために、工員の充足が不如意であつて、そこに隘路が出来るといふやうな實情が出て來るのは非常に遺憾なことである。

このやうに、航空工業は極めて廣汎多岐にわたる綜合工業であつて、何れの部門における隘路も直ちに全般に影響し航空機生産を阻害する事情にあるのであるから、各種部門の跛行を機敏に是正することが最も緊要と認められるわけである。したがつて、わが國全體の企業の極めて大なる部門は多かれ少かれ航空に關聯あるものであつて、航空に關聯ある企業に對し一律に優先取扱を行ふといふことになると、結局すべてが非優先取扱となることになるのである。そして、眞の航空優先措置は適切



キ=Aア戦線にて) 快速の新偵機砂塵をい出て( =ユ=)

なる重點判断と隘路部門に對する是正を主眼とする必要があるので、重點部門の決定となる隘路の所在などは一律にこれを擧げることが不可能な状況である。

先にも述べた如く、工作機械の工場、あるひは素材をつくる工場に對しては、工員の充足が不如意であるために、限られたる工場機能を極度に利用するための二直交替制の實施が不可能である、といふ如き實情に陥る場合もある。これなどは、世間一般の航空工業に對する認識の不足から生じる遺憾なる現象に外ならぬ。

## 航空機工業の推進と日本人

また一般に、航空工業が恰も高度の熟練と特殊の技能とを必要とする工業であるとの印象を與へつゝある感がないではない。しかしこれは、いはゆる職人氣質が然らしめるところで、わが航空工業の全面的立ちあがりならびに企業轉換をなす上には、實はこれが非常に大きな障碍となるのである。

實際設計技術の部門においては、當然他産業とは別個の性格を有することも事實であるが、多量生産の部門においては敢て他産業と格別に懸隔した性格があるとは決していへないのであつて、今日わが國

における兵器の多量生産上最も要望せられつつあるものは、必ずしも特殊の技術ではなくて、かつて全世界を壓倒した輸出産業部門において日本人が見せたところの勤勉、誠實、努力、創意、工夫、上下の信頼による忍苦結合、不撓不屈等の粘り強さの美質であると私は考へてゐるのである。

現に社長以下工員に至るまでの有機的組織結合をそのままに、工場と共に航空機部品工場に轉換し、かつて紡績工業において發揮した美質を航空機部品製作に應用して邁進した工場が、操業一年ならずして、製品の優秀および工程能率等の發揮等において先進の會社を遙かに凌駕せるが如き事實を挙げれば實に枚擧に遑がないのである。

また、櫛あるひは齒ブラシ等のセルロイド製品を以て、かつて世界市場を風靡した某セルロイド會社が、機體部品その他の兵器を製造して一躍三倍乃至五倍の生産実績を挙げた例もある。

但し、これに反して、轉業工場から人を除いた工場施設だけをとりあげて新たにたちあがつた工場はその能率を十分に發揮するまでに相當の時日を必要としてゐるのが現状である。われわれとしては、今後とも出來得る限り既存企業の有機的結合を崩さないやうに轉換を指導して行くつもりであり、また各業者間においてもこの方針を以て事に當られることを希望するものである。

かうして、航空機工業の有機的つながりを保持してこれを巧みに運營した場合、先にも申した通り昭和十九年度の航空機生産目標は極めて老大な數字になるのである。この數字は、一ヶ年前には私自身で

## 今こそ元寇の秋

さへも不可能と思つた位大きなものであつて、このことからいふと私自身も他人に頭の切替を強要する資格がない位であるが、現在では國民全體がその心算になつて努力し協力して下さるならば、一年前の研究における不可能も今日では自信のある可能なものであるといふことがはつきりいへるのである。

元寇の時には博多灣に元軍十萬が來た。その時に、日本の危機が迫つたと言つたのであるが、あの當時と今とは武器が違ふのである。

元軍が博多灣に迫つたのと、日本本土から數百哩のところ、敵の飛行場が出來たといふのと、同じ危機になるのである。いよいよ皇國の興廢といふことになつたならば、遠いところのこのやうに言ふが、既に今がその時なのである。元軍は既に豊岐、對馬に押寄せて來てゐるのである。昔に比較して距離が違ふために、まだ遠いやうな氣がしてゐるが、決してさうではない。元寇の役の豊岐、對馬が現在のマーシャルとかラバウルである。これに目覺めることが遅かつたならば、後になつてあわてても時機既に遅しといふことになる。

今や第一線の勇士は、「天皇陛下萬歳」を唱へつつ次々と死んで行く。私共も死物狂ひにやるから、諸君も死物狂ひにやつて頂き度い。生やさしいことではとても豫定の飛行機は出来ない。また豫定の飛行機が出来ないならば勝てないのである。

しかし私には諸君に號令をかける権能もないし、また毛頭その氣持もない。私はただ微力ながら生命を賭けて努力する。しかし私共に課せられた責任は餘りにも大きい。どうか諸君も一生懸命にやつて頂き度いとお願ひするばかりである。この仕事は實に、上は總理大臣、參謀總長、軍令部總長より、下は子供にいたるまで一億のものが死物狂ひになつてはじめて達成し得るやうな大仕事なのである。

とはいへ、私共は航空機生産の責任を今更諸君に轉嫁しようなどとは毛頭考へてをらない。私共自身で出来ることは生命を賭して遂行する。しかし僅か百人、千人が熱心に努力すれば出来るといふやうな生やさしい仕事ではない以上、國民全體が各自航空機生産の責任を分擔したつもりで、努力し協力して貰はなければ到底この大事業は完遂出来ないことを重ねて強調し度いのである。

## 航空機増産に參與する道

以上は昭和十九年度の老大な航空機増産に際して、私共航空機生産に關する中央行政に携はるものとして全國民にお願ひし度い單なる抽象的なお願ひに過ぎないのであるが、しからば一般國民は如何にすれば航空機増産に參與し得るか、その具體的方策を指示して貰ひたいと待つてをられる諸君が多いことを私は知つてゐる。そこで、以下少しく具體的な例を示して説明してみよう。

航空機増産に關する具體的事項は政治行政、材料、工業、運輸、勞務、精神等の各種の部面別によりまた官民の指導的立場にある人、直接航空機工業に従事してゐる人、航空機工業に關聯のある基礎的産業、運輸に従事してゐる人、また一見航空機の生産に無關係と思はれる職場に在る人等によつて、また積極的方面と消極的方面とにより、千差萬別であるからこれを簡単に述べることは残念ながら不可能に近いといはざるを得ない。但し無理に、總括的に申すならば、航空機増産の必要性に對する深刻なる認識と、これに寄與せんとする熱意と、これに効果ありと認められる事項の即刻の實行とである。

實例をもつていふならば、工員寄宿舎を訪問して着物の綻びをつくらつてやるやさしい思ひやりは、

如何に彼らを感じせしめて能率の増進に貢献するかわからない。

少しは無理をしても工員の下宿に應じてやることも床しい心遣りである。差當り不要の夜具、蒲團を譲つて工員宿舎に廻すことも結構であらう。

航空機増産にともなつて昨今航空機関係者の激増のため作業服、寝具、蚊帳、軍手等の配給が間に合はず、彼らの住宅問題もまた逼迫してゐるので、これらの融通を圖ることは誰にでも出来る協力の方法である。また電力を節約することも緊要な協力の道である。これは水力発電の新規開發、火力発電の強化等あらゆる對策が講ぜられつつあるにも拘らず、諸種の事情によつて航空機増産に要する老大な電力量を補ふのに足りない實情であるから、一般にこの點に十分な協力をする必要がある。また女中一人を節約し、或は愛嬢を女工員として飛行機工場に送ることも、現在においては航空機獻納に數萬圓を獻金する以上に大なる寄與を爲す所以である。

以上は手近なほんの數例に過ぎないが、これ等を認識すること、または、これに類することを心掛けるだけでも、一般國民として航空機増産に寄與出来る道は極めて多いのである。

## 指導者に想へる

一方指導的立場にある人に特に要求したいことは、「自分も死物狂ひでやるから皆もしつかり頼むぞ」といふ心意氣と、獨善を排して衆智を進んで容れる包容性を持つことである。

航空機生産増強のためには頭の切替へを必要とすることが叫ばれてゐるが、一般に、かならずしも頭の切替へが出来てゐないものもまた極めて多いやうである。自分の努力、犠牲はなるべく少くしてこれを他人に要求し、或はやらなくてはならぬことが解つてゐても自分はなるべく損をしないやうに身を引いて、誰かがやつてくれるだらうと多寡をくくるやうな考へ方が、まだまだあらゆる方面に認められるのは誠に残念なことである。

前大戰で、フランスが危機に直面した時、クレマンソーが官吏を集めて言つた言葉が三つある。即ち

一、二十四時間勤務と思へ。

一、二十四時間経つても解決のつかない問題は俺に持つて來い。

一、會議は絶対に罷りならぬ。電話を以て總て解決しろ。

これが危険に瀕したフランスを助けたクレマンソーの組閣第一に官吏に下した訓示である。これは今日我々が深く玩味すべき言葉であると思ふ。



機闘戦が我ぶ飛を空上線一第方南  
(てに線戦ア=ギ-ユ=)

またすべての法規はこれをうまく適用して戦力増強の目的に副はしむべきであるが、規則に捉はれすぎて却つて戦力増強を阻害するやうな事例も間々見うけられる。法規の末節をいぢくり廻してこれ自分の任務を盡くしてゐると考へる心得違ひな役人も澤山ある。

自分の仕事に對して全責任をもつてやるといふ責任感に徹底せず、徒らに責任を他に轉嫁し他人に責任を持たせようとする傾向も各部に見られる。かかる場合、頭の切替へを要求してもこれが出来ないのならば、人を取りかへるほか仕方がないであらう。

廣く日本を見廻すと、この非常時局において眞に仕事をやれさうな實力のある人物が民間その他に極めて多い。この際かかる人材を廣く登用して、頭の切替へが出来ないやうな人間が高い地位に在つて戦力増強の邪魔になつてゐるやうなところに、入替へる必要があると痛感してゐる次第である。

## 關係者の猛省と自覺を望む

また一方工員諸君に特に要求するところのものは、能率の向上と、資材、電力等の節約である。精神力が能率に影響するところ如何に大なるものがあるかは驚くべきものがあり、上下一致して熱と意氣と

をもつて努力するときは二倍乃至三倍に能率をあげ得た例は極めて多いのである。

自由主義經濟思想の下に生まれた企業を國家的性格の企業に轉換する過渡期においては、經營者と工員との間にいまだ割切れない感情のもつれがあつて、時には甚しく能率を下げつつある事實もあるのは洵に遺憾であつて、これは速かに清算しなければならぬ方面であると考へてゐる。

次に航空機増産の隘路は「開」である。重要物資を死藏し、或は横流しをして私慾をはからんとするものも、航空機増産の隘路を形づくつてゐる。その一つ一つの例を擧げるとは好ましくないが、航空機を作るにもつとも重要な資材としてのアルミニウムについても遺憾ながら材料の横流し、或は開の例が擧げられる。製錬せられたるアルミニウムはその大部分が飛行機乃至は兵器とならなくてはならぬのであるが製品の歩留りが悪くてその半分位は切屑、削屑となるといふ實情である。それでこれらの切屑は剩すところなく、かつもつとも迅速に回収し再生して飛行機に化せられなければならないものである。しかるに従来はこれら切屑は一般に粗略に取扱はれ勝ちで、またその熔解が極めて容易に、素人にでも簡単に處理し得る關係上、不良集荷人を通じて横流れとなつて辨當箱、洋傘の柄、バンドの金具等になつてをつたのである。特に昨年末にお歳暮として工員全員にアルミの鍋を一つづつ與へて善いことをしたつもりでをつたアルミ會社の社長があつたのには驚き入つた次第である。

飛行機の生産量は主としてアルミニウムの量によつて決定されるのである。それで我々はアルミニ

ウムの屑、即ち「返り材」は、一グラムでも元へ返して、飛行機にしるといふことを、口が酢つばくなるほど當事者に言つてゐる。我々が〇〇島で掘出したボーキサイトを澤山の犠牲を拂ひながら、漸く日本に持つて来る。さうしてアルミナにし、デュラルミンにし、次に棒、板、管等の素材にし、これで飛行機を作るのであつて、この行程の間に出来る返り材の量は非常に大きなものであつて、これが完全に元に戻つて、飛行機になるかどうかといふことは、その間の労力と資材を倍にもしたと同じことになるのである。

我々は、これらの實情を、噛んで碎くやうに言つて、涙を流さんばかりに頼んでゐるので、定めし我々の考へてゐることをよく汲取つて大事に扱つてゐるだらうと信じてゐたが、事實はさうではないのである。

最近ある工場の寄宿舎へ行つて見ると、この金で買へない貴重なアルミニウムで實に無數の私物を造つてをつたのである。しかも社長その他がそれに立會つて、恬然としてゐるので更に驚いたのである。

これは、ただにアルミニウムの材料の損ばかりでなく、これを作るのに費された労力も輕視出来ないのである。勞務が足らぬといひつつ、一方ではこのやうなものを作るのに、非常な労力を費してゐるといふことは何としても申譯のないことである。

われわれは今日この際、「返り材」を出来るだけ早く生産部に返す必要を認め、これがために要す



るいろいろな資材や、運搬等の方法にも一般の協力を希望する次第なのである。鐵においてもこの「返り材」の重要性は同様である。

次に工員の自覺の不足がまた重要な隘路となることを認めなくてはならない。重要な職場を離れて私慾のための自由労働その他に走り、工場全體の能率を低下せしめて不當利得を得ようとするものなどがそれである。現下の情勢をよく認識して各自の受持部署に忠實であるならば、かかることのないのが當然であるが、極めて稀な例として、いはゆる熟練工なるものの間に工場を缺勤して他工場に賃金取りに出る、いはゆる「出稼」に出るものがあることはこれまた甚だ遺憾に堪へないところといはざるを得ない。

今日は戦争の最も困難な時であるから、不都合のこと、不公平なこと、不合理なことが到る所にあるのは已むを得ないことである。然しこの際不平は一切口にせず、一生の力を全部出して働き抜かねばならない。各自の努力次第によつて戦争に勝つことも出来るし、また負けもするのだといふことを常に考へ、口先だけでなく實際に滅私奉公して貰ひたいのである。

次に行政機構、各種統制機構、あるひは企業體內における地位を利用して情實により私腹を肥やし、業者を泣かせてゐるものなど、その數は多くはないやうではあるが、まだそのあとを断たないのは國家の明朗性を甚しく害する。これらは何れも國家を敗戦に導く結核菌的存在であり、超非常時のこの際

その罪死に價する不届きな存在であると思ふのである。

### この實例を見よ

以上に擧げたやうな悪い例に屬するものも少しはゐるが、他面頭の下るやうな積極果敢な會社首脳部、職員、また眞に仕事と取組んで精勵し第一線の勇士に比しても決して劣らぬ貢獻を國家に捧げてをる工員諸君も非常にその數が多い。

この良い實例を紹介する。私の知人の兒玉譽士夫氏は、今度の戦争が始まると同時に、「今は右翼も左翼もない。政治問題なんかやつてゐる時期でない。直接戦力に寄與貢獻する仕事をやりたい」といふので、それ以來海軍省囑託として非常に重要な任務をやつて貰つてをつて、非常な成績をあげてゐる人であるが、ある鑛山が自分の手に轉つて來たので本務の片手間に部下を使つてこれを開發してゐるが、初めは螢石を出してゐたが、そのうちに三〇%乃至八〇%の高品位の鉛の鑛石にぶつかつたのである。最近、その溜つた鑛石百トンに來たが、その時「今後その山から出る鉛の鑛石は、全部軍需省に獻納します」と言つた。そこで、私は、兒玉君に「全部ただで獻納しては、君は損するぢやないか」と

いふと、彼は「運賃と精錬費とは、あなたの方で持つて下さい。併し、採掘と選礦の費用は一文も要りませぬ。國に獻納するんだといふので、皆が殆ど奉仕的にやつて呉れてゐるので、費用は一ヶ月に三千圓要るだけです。一年でも三萬六千圓です。私は色々な報酬等で貰つた金が今十萬圓あります。二年や三年は私の財産を皆投出して、それで大丈夫です。鑛石に對しては一文も要りませぬ。この戦争が負けたならば、私の金なんか問題ぢやないから、こんなものは十つかり出します」と言ふ。國と死生を共にするといふことに徹底して現にこれを實行してゐるのである。

一般には口では滅私奉公を唱へるが、本當にさうなつてゐない。問題は何でも實行である。更に今一つ良い例として、山形縣の配電會社の社長談を紹介する。

山形縣は特殊事情があつて、電氣のサイクルが五〇サイクルの所と、六〇サイクルの所とあり、また電壓がいろいろ變つてゐて、ここは小さな發電所が濫立してゐた所であつたが、それをここ一年位の間、うんと整理した。のみならず、非常な努力を拂つて、水源を無駄のないやうにした。その結果從來八千萬キロワット時出てゐたものが、更に五千數百萬キロワット時を増加した。即ち六割の電力が殖えたわけである。

現在、この地方は、氷點下十度といふ寒さであるのであるが、發電所の水源池や水道の堤の間から水が滲みて流れるのを調べるために、鋸屑を流して、その鋸屑が何處で止るかを見て滲み込む場所を突きと

めて、そこで水の中へ飛び込んで粘土を詰め込む。一滴たりとも他所へ流さぬ。その上小さい凡ゆる流れを引いて來て水力にしてゐる。普通ならば、セメントがないから出來ぬといふ所を、決してセメントなどに頼らぬ。從來の日本の粘土を以て、其處を詰めてゐる。また大抵ならばセメントでやる所を、皆、土を俵に入れ、それを積重ねてやる。所が近頃薬工品が不足でなか／＼一時に澤山入らない。すると社員に、皆俵を何枚づつ持つて來いと申付けてそれに土を詰めて土堤を築く。こんな調子で何でも他人に頼らずに、自力でやつつける。氷點下幾らといふ所で、現在でも水にとび込んでやつてゐる。前社長の息子もその中にゐるのである。常識的にいふならば、電力は急には殖えるものではない。發電量を殖やすのは大變のことである。發電所を造り、堤防を築くには、セメントがないとか、何がないとか直ぐ言ふものだが、山形縣ではその配電會社の社長の意氣込によつて、總ての人がその氣持になり、かういふ立派な実績をあげてゐるのである。

このやうな話を聞くことは、私としても頼もしい限りである。

## 女子も奮起せよ

ここで一言申添たいことは女子の職場への進出である。平和時代の産業においては、わが國の女子は偉大なる役割を擔當したものであるが、現在航空機生産における女子の進出はまだまだ不十分である。今後はこの役割を積極的に買つて出て、健全なる男子を戦線に送るべき秋であることを強く感ずる次第である。

諸説並に經驗に徴してみても、航空機並に化學、光學兵器、計器等精密を要する兵器の製作の如きものは、女子の作業として最も適當なものであつて、従順で忍耐力も強く同一作業に倦まず努力するその獨特の性質を利用すれば、作業の種類によつてはかへつて男子に優るものが多いといはれてゐる。

現在獨英においては、航空工業の直接工の中その四十パーセント乃至五十パーセントが女子であるのに對し、わが國では男子勞務資源の不足にも拘らず、いまだ備かに十パーセント乃至十五パーセント程度に過ぎない。

これは女子の勞働力にまだ十分な餘力があることを示すと同時に、今後大いに女の方々の御發奮を願



熟情こめて機體組立作業に精勵する  
女子挺身隊員

はなくてはならない部面であると考へるのである。わが國において女子が航空工業に全面的協力をしてをられるよい例としては、滋賀縣の近江航空工業があるが、同工場では全員の約七十パーセントまで女子を使用し、わが國における女子の美德をますます涵養するが如き精神指導のもとに機體部品の製作を實施して極めて高能率の成績をあげてゐるこれに劣らぬ成績を擧げつつあるものが片倉製糸、郡是製糸

系統の轉業工場に相當多數あるのは喜ぶべき傾向であつて、今後この部面にはますます有望な餘力があることがわかれると思ふのである。

## 結

## 語

わが國航空機工業の現狀並に將來の方策、およびこれに對する希望等は、大體以上に述べた通りであるが、何れの航空機工場も急速に擴張せられた結果現在では勞務管理が不完全なものが多く、何千、何萬といふ多數の工員を使用してゐる工場が一通りのことでは高能率を發揮するとは考へられない。故に工員各自が自ら責任を感じ、死物狂ひでやるやうにならなければ、たとひ軍需生産が社長の責任制に移つたからといつても容易に成績が上るものではないことをここに付け加へて置きたい。近頃勞務管理だとか勤勞管理だとか西洋くさくむづかしさうに言はれるのであるが、その根本は上下並に左右の精神的結合に外ならない。さうしてその又元は現時局に對する深刻なる認識の上に立つ各自の國家に對する責任の自覺と上の下に對する親心であると私は信するのである。

そこで、最後に一つ重要な問題がある。これは「時」の問題である。今年度の決戦を控へ「時」の問題

はもつとも重視を要する要素であつて、今日の新鋭機も明日の舊式機である。更に今日の百機は來月の二千機に勝り、今年の一萬機は明年の十萬機に勝るであらう。故に航空工業にあつては時機に投ずる生産を絶対に必要とするといふことを總ての人々が念頭から離してはならないのである。

本戦争の解決法について米國の要路者が昭和十七年十二月七日開戦一周年記念日に當つて次のやうに述べてゐる。

「今次の戦争を解決するものは血と、汗と、涙である。出征兵士の流す貴き血と、銃後國民の勤勞の汗と、苦痛を堪へる涙とがすべてを解決する」と。

われわれはこの方式に従つて戦争を解決して行かねばならぬ。すなはちこの方式によつて敵を徹底的に困窮に陥らしめ、戦争の慘禍を満喫せしめなければこの戦争は解決しないのである。しかもなるべく味方の犠牲を少くして、敵を困窮に陥らしめなければならぬ。換言すれば常に有利な戦争をしなければならぬのである。

しかるに有利な戦争を行ふためには、如何に皇軍が勇猛果敢であつたにしても、精銳なる武器を、特に飛行機を敵に比して相當額を持ち、その上地形の利を極度に利用することが絶対に必要である。わが勇敢なる將兵の犠牲を最少限度とし敵に最大の損害を與へるため、極めて多數の飛行機が必要である。すなはち航空機の大増産が豫定通り進捗するか否かによつて勝敗の數は決するのである。

生産目標への到達は、國民、一億國民の努力如何によつて可能である。われわれ國民は死物狂ひで努力することを誓はう。

私はここに、航空機増産はまた諸君自身の責任と考へて頂いて、最善の努力と協力をお願いする次第である。

櫻が咲いても當分は花見もしてをられない。然しその中に米英をたたき潰してその上で爛漫たる櫻の下で只今の苦心を語りつつ勝利の祝盃を擧げる平和の春が来るであらう。

勝つまではしつかりやりませう。私もやるから皆さんも頼みますぞ。

## 太平洋空戦の實情

以下の二つの談話はまさに現戦局の焦點として日一日と急迫白熱の度を加へてゐるラバウル攻防戦の血しぶきの中から、最近歸還した〇〇海軍大佐と〇〇海軍主計大尉の語つた南太平洋戦局の實相である。〇〇大佐は同方面海軍部隊参謀として、また〇〇主計大尉は同じく水上部隊主計長として、共に敵がガダルカナル島に上陸した一昨年夏以來一年半にわたり、身を以てそのソロモン反攻作戦と戦つてきたのである。

壓倒的な敵の物的戦力——特に航空兵力に比して常に我方が餘りに寡少であつたばかりに、個々の幾多の戦闘では戦史未曾有の大戦果を擧げてゐながら、大勢においては歩一步と押されつつある戦局の現況を率直に述べつつ、しかもなほ烈々たる必勝の信念を以て叫ぶ、「一機でも多く……一刻も早く」といふ言葉こそ、前線將兵の銃後國民に對する切々たる血の呼び掛けと言ひ得る。

## 断じて撃摧し得る信念

〇〇海軍大佐(談)

### 敵の物量を壓倒する精神力

敵がガダルカナル島に反撃上陸してきて以来のソロモン戦局を一言にしていへば、質と量、精神と物質の死闘であつた。そして遺憾ながら我方がじりじりと押されてきた。あれほどの大きな損害を敵に與へたにも拘らず、大勢は次第に我に利あらず、現在にいたつたと残念ながらいはざるを得ないのだ。

だが、これは決してわが精神力が敵の物質力に對して遂に齒が立たないことを意味するのではないことは勿論だ。逆にわが質の優秀と烈々たる精神力が、常に敵の壓倒的な量と物質力を押へてきた事實を雄辯に物語るのが度重なるあの大戦果だと言ひ得る。ところが、戦果と戦局を混同してはならぬといはれてゐるやうに個々のどの戦闘においても、世界の海空戦史上未だかつてなかつた程の大きな戦果を擧げながら、それをそのまま戦局の有利な展開にもつて行けない、つまり戦果即戦局といふことになし得なかつたといふのも、率直にいつて物的戦力——特に近代戦において海上作戦でも、地上作戦でも、或は補給作戦でも、あらゆる戦ひの歸趨を決する絶対の前提条件となる航空兵力の彼我の懸隔が、常に餘り

に大きかつたからに外ならないのだ。

この彼我航空兵力の量の差についてはしばしばいはれてゐるやうだが、一般にはどんなに少いといつても敵の半分はあつたのだらう位に考へられてゐるのではないだらうか。どうしてどうして、到底そんなものではなかつた。それ位の差なら精強無比、常に寡を以て衆を制する我海軍航空部隊を以てすれば、断じて敵に押されるやうなことはないのだ。

第一次ブーゲンビル島沖航空戦の時のわが攻撃機数が大本營發表の如くあんなに少かつたといふ一例によつても彼我航空兵力の差が、一般の想像よりも遙かに大きかつたことがわかると思ふ。

航空戦の著しい特質は、敵に對して航空兵力量の比率がある程度以下に下ると、段違ひに卓越した精神力、戦闘技術の實力を以てしても、なかなか難しい戦をすることとなり従つて物量比にも自ら限度があることだ。ここに大勢を如何ともなし難かつた最大の理由があるわけだ。

更に航空戦のいま一つの大きな特質ともいひ得ることに、航空戦に伴ふ激しい消耗とその補充の問題がある。大本營發表の通り、我方の損害は敵に比べていつも非常に少い。いふまでもなく、これは我海軍航空部隊の遙かに敵をしのぐ攻撃精神と戦闘技術によるのだが、あの損害比ならば、いくらアメリカがたくさん飛行機を作つたにしてもさう數に開きもなくなるわけぢやないかと考へられ勝ちだ。しかし、それは搭乗員も機體ももろともに失つてしまふあの自爆、未歸還の外に、被弾その他のためによしんば

基地に歸投したとしても結局消耗となる何倍かがあるのを知らないからだ。従つて發表の損害數の三倍、五倍を補充したとしても決して絶對數は殖えないのだ。だから、ちびりちびりと少しづつの補充しか出來なければ、絶對數の現状維持も難しい。むしろ彼我兵力量の差は次第に大きくなつて、損害比もそれに比例して増大する。前進航空基地に飛行機を置けなくなつて、後方に下げざるを得なくなつたのもそのためなのだ。

「二機でも多く！」といふ言葉がとかく上すべりのした單なる合言葉となり、或は十分の上にもつと餘計に——といふ感<sup>かん</sup>じで受け取られてゐるやうなことがないだらうか。この言葉にこめられた前線の要請は、實に以上のやうに切實な、ぎり／＼のものであることをこの際改めて銘記して頂きたいと思ふ。

### 執拗なる敵の侵攻企圖

實例についてお話しすると、昨年六月三十日、敵がレンドバ島に上陸してきた時でも、我々はそれよりすつと以前に、今度はあそこへ來るといふ敵狀判断を持つてゐた。ガ島を中心とする敵船團の動きが積極化しつゝあるを偵知するや、これに對して矢繼ぎ早の先制攻撃を浴びせかけたのはいふまでもない。ガ島の敵航空基地に對しても數回にわたる大攻撃を加へ、共に相當の戦果をあげたのは當時の大本

營發表の通りだ。ところが、そのために我方にも損害があり、また先に述べたやうな相當大きな消耗も出たのは當然のことだつた。だが、敵があれ程の大損害も意とせず、後から後からと注ぎ込んで、更に大量の飛行機、艦船舟艇を以ていよいよレンドバに侵攻上陸を強行してきた時には如何せん、我方の飛行機が僅かに〇〇機。敵の上陸前に次ぎ次ぎと息もつかせぬ攻撃を續行して叩いてしまへばいいのはわかり切つてゐたし、又やつつける信念と闘志ははち切れんばかりなのだが、數の問題で抑へられ思ふやうにやれなかつたのだ。勿論、飛行機が足りないからといつて放りつばなしにしてゐたのでは斷じてない。不可能を可能とする闘魂に燃えて、攻撃に次ぐ攻撃を加へたのだ。僅かな飛行機を驅つて文字通り不眠不休、何度も何度も敵船團攻撃に出動を繰り返す實施部隊將兵の血の滲むやうな力戰奮闘には、本當に頭の下るものがあつた。しかし、その航空兵力では攻撃の回数、時期、方法等にどうしても制限されざるを得なかつた。かうやれば、この手でいけば一步も敵を揚陸させない、ことごとく海上に撃滅し得る——その確信と計畫に十分の成算がありながら、みす／＼敵に足場を固めさせてしまつた。その口惜しさは本當に何といつていいか言葉を知らなかつた。

「もう三十機、いや二十機、せめて十機でもいいから飛行機があつたら……」

と、この時ばかりではなかつたが、空を仰いで思はず齒がみしたものだ。

航空兵力ばかりではなくて、彼我の小型舟艇の數についても同様のことが少くなかつた。赤道に近い

ソロモン、ニューギニア方面の海は静かでもあり、且つ島嶼が多くて海面が狹隘だから大艦艇よりも、海上トラック、上陸用舟艇、高速魚雷艇などの小型のものが多く使はれたのだが、この小型舟艇の数がまた、まるで桁違ひだつた。レンドバに敵が上陸して間もなく、ニューチョーチアの我勇猛陸軍部隊は飽くなき敵機の跳梁下に徒らに守勢をとるより、寧ろ進んでレンドバ島に逆に上陸して断乎攻撃を加へる——と絶対強氣であつた。海軍としても、それが最上の策と考へ積極的に陸軍と協力して準備を進めたが、結局出来なかつた。小型舟艇の足りないのが最大の理由だつた。涙をのんで陸軍も断念したやうな次第だ。その攻撃精神において、その必勝の信念において遙かに敵を壓しながら、結局それを發揮するに由なく残念ながら遂に撤退しなければならなかつたのだ。

### 航空戦力の意義

この航空兵力の量と切りはなし得ないことに航空基地設營の土木力の問題がある。即ちいくら飛行機の数が多く、その補充が豊富且つ迅速であつても、それに應ずる航空基地設營が伴はねば、航空戦力として發揮され得ないわけだ。各種の自然的悪條件を克服して、基地を如何に速かに、従つて多數を整備し得るか、解り易くいへば航空機が戦ひ得る間口をどれだけ廣くし得るかといふことになる。大雑把

な言だが、航空戦力とは搭乗員の精神力及び戦闘技倆、飛行機の性能などのいはゆる質と、補給量と速度を含めた飛行機の數量、それに基地設營力の三者を乗じたものだ。飛行機生産量が如何に多くとも、それがそのまま航空戦力とはならず、基地といふ間口の廣さに制約されるのだが、先に言つた通り敵の量が壓倒的だつたのに加へて、基地設營力がまた相當に優秀であつた。ガ島にまたたく間に三つから五つの飛行場を作り、次いでルツセル島に基地を推進し、レンドバからニューチョーチアに進んでゐるうちに、ペララペラに早くも飛行場を設定するといふ有様だつた。大掛りな機械力を驅使してゆく彼等の技術に比して、我方の人力を主とする従來からのやり方は、すでに著るしく改善され、決して劣らないだけになつてはゐるが、幾多の反省すべき點があつたのだ。

### 機械力の數で我と對等

更にいま一つは最近特に銃後の關心を集めてゐる電波兵器の問題がある。ソロモン方面の戦闘のはじめ頃は敵はそれ程電波兵器を使はず、それだけに帝國海軍の三十年にわたる辛苦の訓練の結晶である夜戦の實力が遺憾なく發揮された。ところが昨年初頭以後になると、敵はあらゆる艦艇、飛行機にこれを裝備してきた。かうなると機械力と訓練に鍛へられた名人藝の太刀打ちだ。眞暗闇の海上で突然初弾か



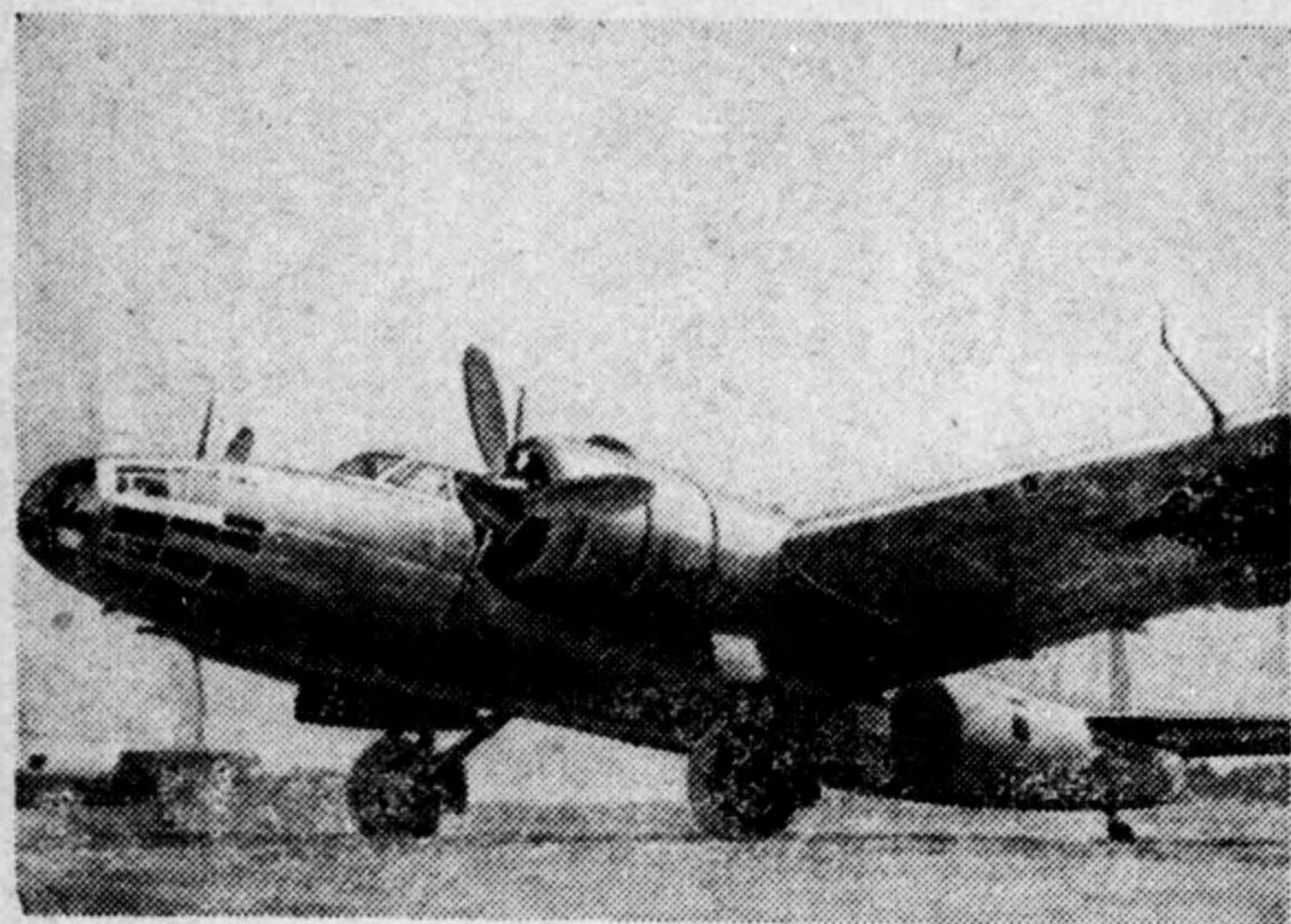
ら正確な命中弾を敵が射つてくるやうになつたのも電波兵器といふ機械力によるのだ。これに對して我方が一步も引けをとらずに戦ひ、常に勝つてゐたのも三十年間の訓練の賜ものがあつたからこそだが、それだけ我方の損害が多くなつたことも事實だ。實際、我潜水艦がちよつと潜望鏡を水面上に現はしてもすぐに比較的正確な攻撃にさらされるといふやうなことも少くなかつたのだから、その苦心は察するに餘りあるのだ。これも電波兵器の質の問題といふより、飽くまであらゆるものに裝備し得る數の差なのだから口惜しい話だ。とにかく、アメリカ海軍の最も苦手であつた夜戦においても、機械力の數で我と對等に近い力量をみせてきたといふことは輕視し得ないことだと思ふ。

以上のやうなことが過去一年半のソロモン戦局の大勢においてジリジリ押されてきた結果を招くにいたつたわけだ。しかし、これは決して我々の弱音でもなければ、また辯解でもない。過去一年半にわたリソロモン水域に戦つてゐるうちに、我々はただの一度たりとも必勝の自信と闘志を失つたことはなかつた。敵のやられても叩かれても注ぎこんでくるその驚くべき量以外には、何一つとして恐るべきものはないのは自信を以て言ひ得る。レンドバ上陸の企圖を早くから豫期してゐたやうに、昨年十二月のマカス岬或はグロスター岬への侵攻上陸でも、我々はすつと以前からすでにそれを豫測してゐたのだ。特に我々の意表を衝く卓越した作戦が敵にあつたわけでもなんでもない。むしろ、廣範圍に兵力を分散して防禦しなければならぬ立場にあつた我戦略態勢に對して、時間的にも地域的にも分散してくる拙劣

で幼稚極まるものしかなかつた。それをただ無限に注ぎ込む物的戦力の量だけで強行するのを常としてきたのだ。その量的差によつて我方が押されただけだ。だから、さういふ量を持つ敵に對抗し得るだけの、最小限の量さへ我にあるならば、決して押されることがないばかりか、必ず勝てるかと斷言し得る。

#### ラバウルを狙ふ強引作戦の意味

しかし、これは決して敵アメリカを單に甘しと輕んずる意味ではない。あれだけの犠牲にも拘らず、次ぎ次ぎに出撃を續けてくるのは、勿論、大統領選舉をひかへて、自國民の前に何かまともな戦果を誇示しなければならぬルーズヴェルトの差迫つた政治的の必要にもよるのであらう。それにはラバウル奪回成る——といふ戦果こそ最も好個のものであることは疑ひのないところだ。だが、それと同時に、アメリカ海軍がアメリカ海軍なりに持つてゐる傳統精神も見逃してはならぬと思ふ。その傳統精神に由来する相當の自信と見通しがあるのだらうといふことだ。それがあればこそ、あの出撃を續けてくるのだ。如何に損害が大きからうが目指す最後の作戦目的を達し得さへすればと、強引に押しまくつてくるのがアメリカ海軍の傳統である。それを認めるに決して我々は吝かではない。南北戦争に勇名を馳せた提督アラガットから、米西戦争に機雷原を乗り越えてマニラ灣内深く突入、大いにスペイン艦



「龍吞」機爆重鋭新す壓を敵然斷

隊を撃破した提督デュエーに繼承され、更に現在に傳へられてゐるアメリカ海軍の傳統精神を確かにソロモンの反攻作戦にみることが出来るであらう。さういふものを十分に認めた上で、なほかつ我々は滿腔の自信を以て斷言することが出来る。決して敵と同數或はそれに近い數の飛行機が要るとはいはぬ。過去一年半にわが方が持つてゐた飛行機の二倍の數さへあれば、必ず敵の侵攻を食ひ止め、三倍になれば進んで敵を撃摧し得る。斷じて勝つ……と。

過去一年半の二倍、更に三倍の飛行機といつても、最初にいつた通り、彼我航空兵力の大差は、半數にも遙かに及ばなかつたのだから、敵に比べて非常に少く、その〇割に過ぎないのは改めて斷るまでもなからう。それだけの飛行機

を日本が作れないはずはないではないか。それには、この戦争が實に太平洋の空において決せられるのだといふ、その本質に徹し、戦争の現況を直視することが必要だと思ふ。多數の航空兵力を優に一線に展開し得るビスマルク群島がわが掌中にあつて、やがて進攻作戦のわが據點となるか、或はこれが敵の手に歸して遙かに敵が南太平洋に持つ全航空兵力をここに展開、更に進んでわが内南洋と南方資源地帯を衝く敵の足場となるか、その岐路に立つてゐるのが戦局の現段階だ。

繰り返して言ふが、わが航空兵力をとりあへずいまの二倍にし、そして更にこれを三倍とすると、ラバウルの勝敗は實にここにかかつてゐる。

そして特にこのことは比較的看過されてゐるやうだが、單に航空兵力量だけではなく、それを一刻でも早く、出来るだけ速に所要の量を送らねばならぬ。一刻おくれれば、苦しさは二倍、三倍に加重してくるのだ。だから私は、先に言つたやうに、本當にぎりぎりの切實な前線の要請であるといふ意味での「一機でも多く!」といふ言葉に、更に「一刻も早く」とつけ加へて心から絶叫せざるを得ない氣持だ。それさへ出来れば、いまこそ敵を徹底的に撃滅し得る絶好の時なのだ。

## 空戦力の優劣こそ勝敗の分岐

〇〇海軍主計大尉(談)

### ソロモン群島の特殊性

一昨年(昭和十七年)夏の第二次ソロモン海戦前後から私がソロモン方面に戦つた約一年半の間に、この戦争の勝敗は實に太平洋における航空戦によつて決せられるのだといふことを身にしみて痛感した。そして、その海洋航空戦の最も典型的なものであるソロモン戦局の推移が示唆する色々の問題に就て、考へさせられることが多かつた。

まづ第一は、ガ島以來ソロモン方面の戦局が歩一步と我に不利な方向に進んできた最大の原因である航空兵力の質と量の問題だが、これは各方面で既に色々言はれてゐる通りで、われわれも敵機の壓倒的な量の優勢には常にどんなに苦しい思ひをさせられてきたか知れない。

まづ量の問題であるが、絶對量において不足してゐたといふことは誰でも想像がつくと思ふが、敵が

局地制空に専念したといふことが、ソロモン群島の地理的な特殊性(防禦據點が點在してゐてしかも各據點間の補給連絡は舟艇機動以外に頼るべき方法のないこと)を考へて見ると、如何に敵にとつて有効であつたかはいふまでもないことである。

局地制空の意義は要するに、基地と飛行距離の關係を意味するものであつて、例へば、或る點における兩基地との距離の比を二對一と假定すれば、その點における同數勢力を保持しようとするためには、基地における所要機數は逆に一對二の割合を要する結果になる譯なのである。

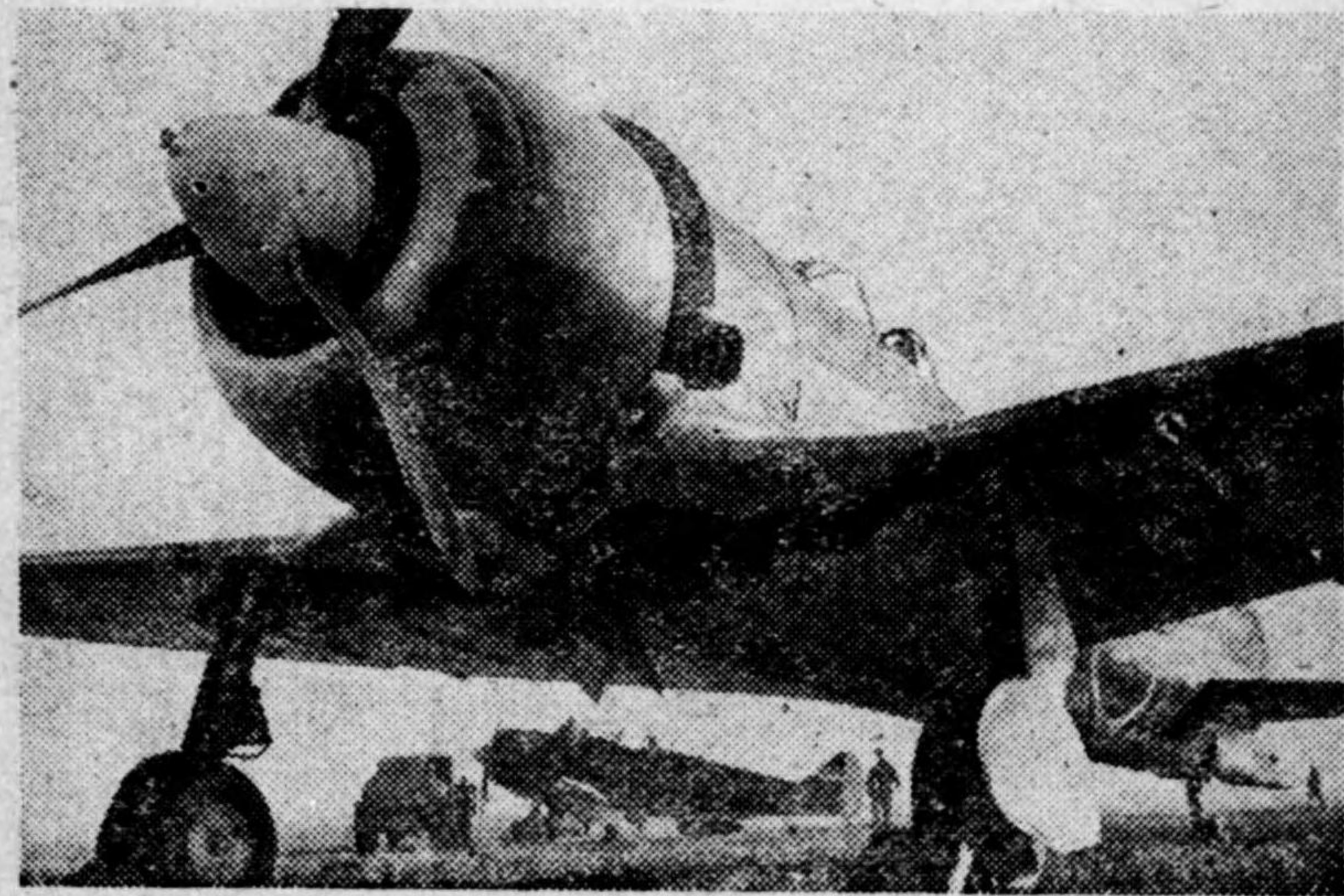
### 敵の局地制空權

敵はガダルカナルのルンガ飛行場を確保すると同時に數百機の飛行機の集中を行ひ、しかもルツセル上空にその行動を限定して極力局地の完全制空に専念したのであつて見れば、如何に我精強を誇らうとも、ガ島周邊における制空權は、完全に敵の手中に握られたのも無理はない。我々は飛行機の爆音を聞けば殆ど常に星のマークを睨んだものであり、わが精銳なる航空隊の攻撃の戦果とは別箇の問題として、叩かれる側(水上艦艇及び地上部隊)から見た制空の威力といふものを考へてもらはねばならな

最近世で、良く「質よりも量です」<sup>さい</sup>といふやうなことを、物分りの良いことを自認してをられる人から、尤もらしく話しかけられることがあるのだが、果して、量の問題をこの局地制空に結びつけて考へてゐるだらうか。局地制空を有利に展開するためには、戦場の最も近くに飛行場を確保するのが何より大切であるが、基地の設営が、非常に重要な近代戦の要素となつてきてゐることを知らなければならぬ。

ガ島攻防戦は敵が飛行場確保に成功したことが最大の勝因の一と看做され得るが、我にそれに對抗し得る基地設営能力が甚だしく劣つてつた點を認めない譯には行かぬ。

勿論死兒の齡を算へる愚に類するが、ガ島攻



その高性能に敵空軍の膽を寒めしめる  
わが鍾馗の雄姿(大々陸〇〇基地にて)

防戦の最中にあのムンダ、コロンバンガラ兩飛行場の完全整備が整つてゐてさへくれたならば、と考へるのである。

敵はニューギニア島の攻略の際も極度に局地制空に専念し、しかも設営機械化部隊を極度に合理的に運営したのであつて、量の絶対優勢をいやが上にも確實なる基礎の上に推進せしめ來つた點を見逃すことが出来ない。

### 學ぶべき敵の基地設営法

それならば如何なる方法で敵は基地設営を行つたかを検討してみると、ある島に上陸するとまづジャングルを伐り拓くトラクターや伐木機械を揚げる。そしてみる／＼戦闘機の發着出来るだけの幅をとつて兩側に樹木を伐り倒し、それをそのまま地上からの攻撃に備へる防壁とする。開かれた空地へはいちいちローラーをかけたりしないで、特殊なセメントを厚く撒き、それに一面に水をかけて固めてしまふ。時には折疊みの出来る鐵板を敷く。そしてとにかく發着が出来れば、すぐ上空直衛の戦闘機を飛ばしながら、ちよつとした飛行場なら、全く人の入りこむことの出来なかつたジャングル内にも、僅か一ヶ月位で作りに上げてしまふといふ有様だつた。しかも同じ島に我守備部隊がゐても、陸上交通の全く

不可能な千古不伐のジャングルにへだてられて容易に近接出来ないやうな地帯をねらつてくるのを常とした。トロキナ岬へ上陸後僅か〇〇日目には、飛行場が出来て阻塞氣球を揚げてゐたといふのもその一つの例だ。

このやうな方法で敵は次ぎ次ぎに基地を推進してきたのだが、その他全然未開の島ばかりであるソロモン群島の、特殊な自然的條件に適合するやうな新しい器材兵器をどんどん持ち出してきてゐる。例へば、陸岸に直接棧橋なしで揚陸出来る装置を持つ千、乃至三千、級の特種輸送船もその一つだ。或は島傳ひに小型舟艇をもつて補給する以外に方法がないとなれば、海上トラックはもちろんのこと、上陸用裝甲舟艇等各種の小型舟艇を準備すると同時に、その護衛艇として魚雷艇をも随伴させるほど遺憾ない處置を講じたのである。——さういふアメリカの工作能力といふか、物的戦力の必要量を整へるアメリカ海軍の事務的能力といふものはなかなか輕視し難いと思はれた。つまり、かういふ實利的な物的戦力の多量を急速に整備強化するといふ點において、確かに我方に立ち遅れの感があつた。

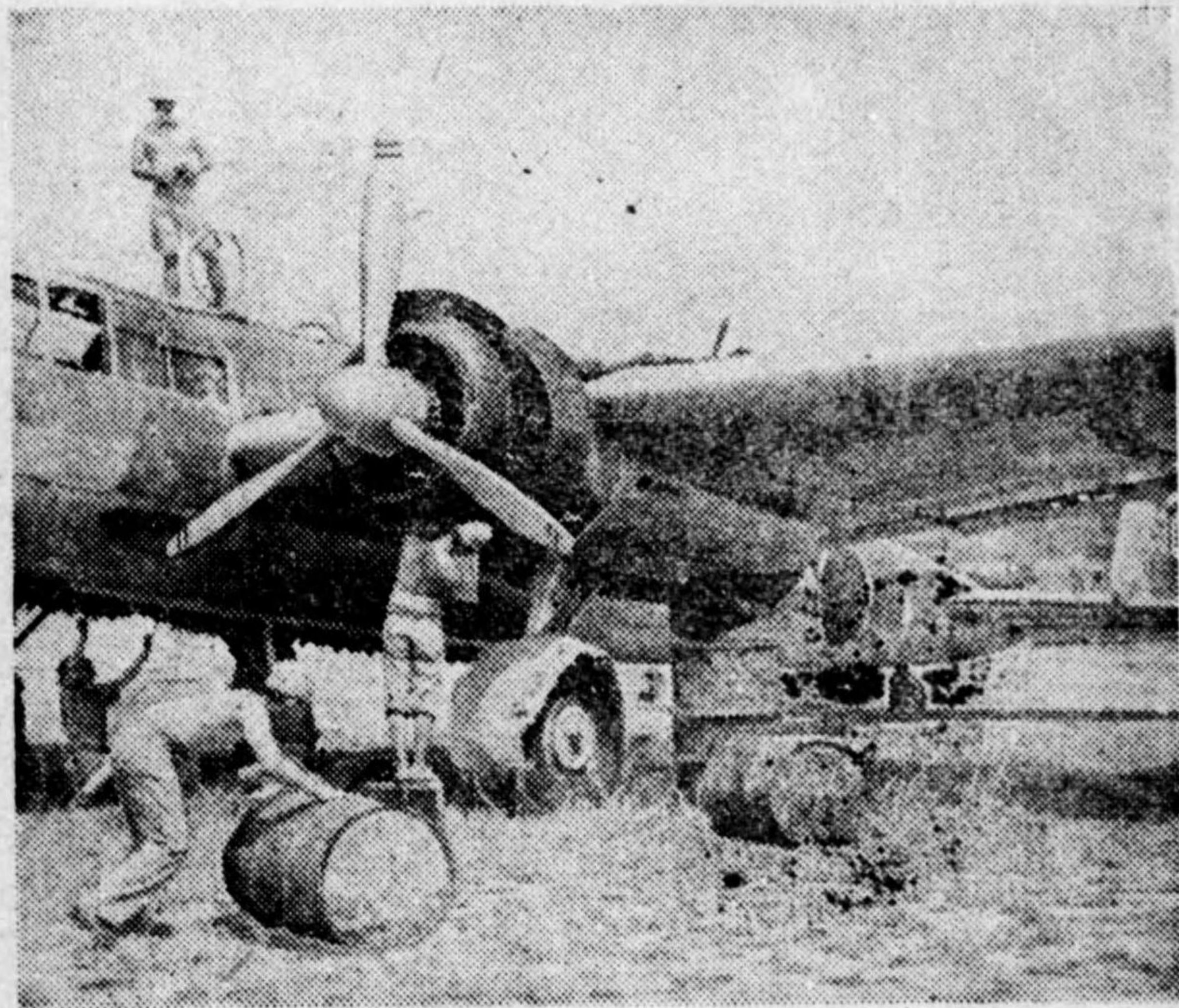
しかし、それとてアメリカ式の極めて常識的な合理主義以上のものでしかないとしても、理窟はとにかくとして、確にその實力は恐るべき威力であることを認めない譯には參らぬと思ふ。

### 優秀を誇る我戦闘機

次に質の問題だが、我航空機は戦前たしかに〇年は遅れてゐると考へられてゐたが、實際には、戦闘機の如きは断然日本のそれは世界的水準に在る事が分つて、大變心強く感じた。あの有名なエアラ・コブラと稱するP三九（陸軍機）F4U（海軍機）の如きも全然問題とならず、敵は日本戦闘機と遭遇した時は同数の場合は絶対に空戦すべからずと言ふ指令が出てゐる位であつた。

要するに敵は、質の缺陷を量と巧なる局地制空の運営によつて、補つて來たとも考へられるのである。然し他の機種（戦闘機以外の）に於て、特に哨戒爆撃機等に於ては、敵は優秀な機種を擁してゐた。防禦裝備の完備せる爆撃機の發達は全然その攻撃精神の相違を物語るものではあるが、それが哨戒機としての實際上の性能は、寧ろ意外な効果を發揮したものと云ふべきであらう。

もともと敵の哨戒だけは非常に嚴重だつたのだが、特に昨年五、六月頃、レンドバ攻勢の少し前あたりから、ボーイングB17とか或はコンソリデテッドB24などの大型機を以てする遠距離哨戒を著しく強化してきた。飛行機の數にあかつて、夜であらうが晝であらうが、或はどんなに悪天候でも、のべつ幕なしに哨戒機を飛ばし、哨戒の網の目を縦横に張りめぐらしてゐた。ニューチョーヂア、コロンバ



遼に赤道を越え、南半球の炎天下に活躍す  
 整備員(〇〇海軍基地にて)

### 反攻企圖にみる敵の自惚

だが、敵がソロモン反攻にみせた自信と闘志は、全くこの航空兵力の壓倒的な数の優勢と機械力に關する思ひ上つた自惚に由来することは疑ひのないことだ。〇〇で捕虜にした奴を訊問してみても、彼等が如何に物質的戦力の數量をたのみ、その機械力において、はるかに我に優れてゐると信じ込まされてゐるかに驚いたほどだ。何といつても、

「アメリカは必ず勝つ」

ンガラに對する補給作戦の時なども、どんな小舟艇でも必ず敵機に接觸されないこととてなく、しかもその執拗なことはお話にならぬ程で、われわれの苦心は並大抵ではなかつたのだ。我に飛行機の上空直衝さへあれば、勿論哨戒機の如きは、大したことはなく、またよしんば哨戒機に接觸された結果、敵機の襲撃を受けたとて強行突破の出来ないことはないのだが、僅か數機で直衝するとしても實際にはその數倍の飛行機が必要なのだから我々としては無理をいふことは出来なかつた。我々は萬難を排して補給をやつたのはいふまでもないが、それには實に血の出るやうな勞苦を忍ばねばならなかつた。また他の兵器部面を考察してみると、電波兵器、或はそれに關聯せる射撃裝備、電信兵器、また爆撃照準器等において優秀な武器を持つてゐる點も率直に認める必要があるだらう。

その反面、敵にも随分お粗末なものがたくさんある。われわれは、十月十二日を皮切りとして著るしく強行してきた敵のラバウル大空襲に對して何度も戦つたが、十一月二日にしても或は五日の空襲でも、あれだけの飛行機で、あれほど猛烈に襲撃しながら我方が殆ど大した損害を蒙らなかつたのも、その不徹底な攻撃精神のためばかりではなく、爆弾或は魚雷の性能の悪いものが多かつたからだと思ふ。特に十一月五日にはグラマンTBFが雷撃もやつたが、丁度それと前後して起つた數次のブーゲンビル島沖航空戦で我雷撃機の放つた魚雷の恐るべき威力に比して、あまりにもみじめなものでしかなかつた。

と譲らなかつた。物的戦力の量においてもまた質においても、格段の差があるからだといふのだ。アメリカの爆弾や魚雷の性能不良をきかしても、

「アメリカ製には断じてそんなのはない」

といひ張る。それを絶対確信してゐるのだ。實物をみせてやるとさすがに多少動搖の色をみせてゐた。その後ラバウルに連れて來られて、我軍艦や航空部隊の威容をみてから、はじめてすつかり自信をなくし、まるつきり悄氣返つて、しきりに首をひねつてゐた。彼等がきかされ、信じ込まされてゐたのとはまったく雲泥の差のある我艦艇、飛行機の威容をはじめめて自分の眼でみておどろいたといふわけだ。

以上は、私の體驗を通じて感じたことについて、敵側の長所と思はれる點も率直にいつたわけだが、この捕虜の實例でもわかるやうに、敵はその物的戦力に對する徹底した自負に裏附けられて、相當旺盛な戦意を持つてゐるのは事實である。また過去一年數ヶ月のソロモン戦局は、確かに敵の物質力に對して、比類なき精神力と訓練の卓越した技倆とで戦ふわが方が、結局次第に押され氣味で、遂に敵がニューブリテンの一角にとりつくといふことになつたのだ。

### 近代航空戦の典型

敵がニューブリテンの一角にとりつくまでの約一年間の航空戦の推移は、近代航空戦の典型だと言ひ得るだらうから、その様相を検討してみると、大體四期に區分することが出来るのではないかと思ふ。

第一期は四月頃までの期間で、彼我共に夜間爆撃を應酬するだけで、いはば航空基地と兵力の準備時代ともいふべき期間だつた。敵機が空襲に來た時も吊光投弾を投下し、主として我飛行場をねらつて爆弾を落とす位のこと、それ以上のことは餘りなかつた。

それが四月末から五月に入ると、敵はガ島の飛行場の整備を終り、その他ポート・モレスビー、ミルン灣のラビ等に續々と大型機を集中して進攻の態勢をみせはじめた。これに對して、我方が果敢な先制攻撃に次ぐ攻撃を加へ、ガ島の晝間強襲を繰りかへしたのを始め、一方ではミルン灣とモレスビーも間斷なく襲つたのである。そのために敵は大損害を蒙り、その進攻態勢が挫折するや、六月頃からは飛行機による宣傳戦を始め、噴飯ものの宣傳ビラを飛行機で撒いていつたり時たま夜間爆撃に來るといつた程度だつた。この期間が第二期といふわけだが、この頃から先にもいつたやうに敵が大型機による長距離哨戒を著るしく強化してきたのであつた。またわが機が夜間に敵の意表を衝く大戦果を収め、その心膽

をおびやかしたのもこのころであり、いはば神経戦といった傾向があつた。第三期は六月末から七月、八月、九月ごろまでの期間で、敵のレンドバ攻勢にはじまるニューヂョーア、コロンバンガラ方面の血闘が展開され、敵はその方面の局地的制空に全力を傾注し、ラバウルなどに對しても殆どやつて來なかつた。この中部ソロモン方面の作戦で、敵がやつた局地に壓倒的な航空兵力を徹底して集中使用する一方、大型機の長距離哨戒を強化するといふやり方は著しく目立つものがあつた。その實效に關しては初めに詳述した通りである。

次いで十月十二日のラバウルに對する本格的な空襲にはじまるニューブリテン島をめぐる熾烈極まる航空決戦の期間——即ち第四期に突入したのである。この十二日の空襲は、まづ戦爆連合約百五十機が執拗に、主としてわが飛行場を目標に反覆攻撃を行ひ、次に大型機約五十機が港内艦船及び飛行場に爆撃を加へてきた。いづれも五、六千呎の高度で各編隊がそれぞれ侵入角度を違へての執拗な攻撃振りだつたが、その割には我方損害は極めて輕微にすぎなかつた。しかしその後十八日、二十三日、十一月二日といつたやうに相次いで大編隊を以て來襲し、いよいよ敵のラバウル攻略の意圖を明らかにしてきたのである。

### 眞珠灣の仇討と呼號

特に十一月二日の大空襲は、いまだかつてなかつた超低空で攻撃してきたもので、來襲機數も二百數十機に上り、戦意もまたなかなか熾烈なものが感ぜられた。私も艦上でその敵機と戦つたがその攻撃振りをみてゐると、敵ながら天晴れと思はれるほどであつた。丁度「リメンバー・パール・ハーバー」(眞珠灣の仇討だ)とでも絶叫しながら襲撃してくるやうに感ぜられた。敵の戦意がそのやうに旺盛だつただけに、これを邀撃する我方としてもそれだけやつける絶好の機會であつたわけで、私の艦だけで確實に十一機は撃墜してゐるのだから、この日の戦果は二百一機撃墜と大本營から發表されてはゐるが、それは極く内輪の數で實際はもう少し多かつたと思ふ。それにしても、來襲機數の八割以上をやつつけるといふ戦果はまことに目覚ましいもので、敵のその日の戦意もさることながら我海軍航空部隊はじめ陸海軍地上部隊、海軍水上部隊の闘魂と實力はそれ以上に大したものだし、それまでしばしばいつてゐたやうにある程度の飛行機の數さへ揃へば絶対に勝つ……といふ前線將兵の確たる自信を、嚴とした事實をもつて示したのだから頼もしい限りだつた。この十一月二日のラバウル空戦の大戦果が、續いて起つたブーゲンビル島沖航空戦のあの赫々たる勝利を招く一つの大きな原因であつた意義を忘れては



ならないのだと思ふ。

則ち我が最大の基地ラバウルに主戦場が接近して来た點と、ラバウル飛行場に整備されてゐたわが航空機の數量とが、今までの各戦場における場合と遙かに實質的に相違のあることを忘れてはならない。航空機の量といふことが、航空戦の決定的要素であることは勿論だが、常に戦場と主要基地との距離の問題を、量的考察の重要な要素として考察することを忘れてはならない。かういふ觀點から見れば、あの驚くべき戦果を理解され得るだらうしました、あの戦果こそは、神がかり的な夢想の數字ではなくて、忠勇なる必殺の戦士の技倆は今更いふまでもないとして、更にこの量的部面においても従來の如何なる航空戦よりも遙かに我に有利に展開されたものであるといふ確實なる根據をつかまなければならぬ。

もう一つは、このラバウルに對する本格的空襲をはじめて以來、敵は市街地には主として焼夷彈や落下傘爆彈をバラ撒いたのをはじめとして、艦船、飛行場等の攻撃目標によつてそれ／＼攻撃方法、投下爆彈の種類の使ひ分けをしてきたことも特筆に値するが、敵のラバウルに對する野望のいかに強烈で本格的であるかを物語るものだと思ふ。

### 鐵壁のラバウル、逞しき將兵の意氣

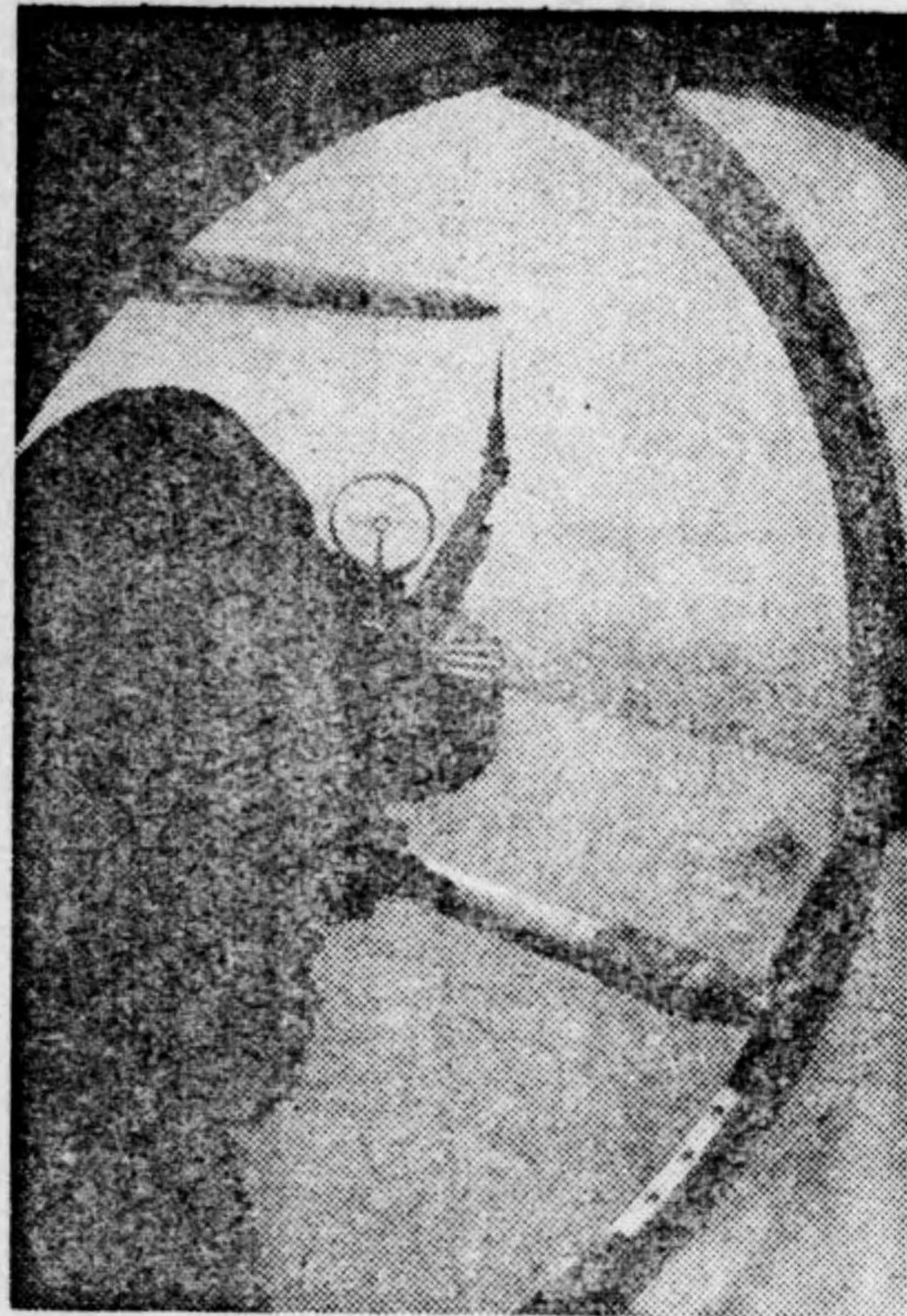
今年（昭和十九年）に入つて、ラバウル攻防を中心とするその方面の航空決戦はいよいよ激しく、文字通り晝夜を分たす續けられてゐるが、ラバウルの將兵の士氣は眞に軒昂、飽くまで自信に燃えて本當に明るいものがある。我にいま少しの飛行機と小型舟艇あらば……といふのがソロモンの將兵全部が抱く切なる思ひであるのだが。

その根據は、敵の行つた局地制空を逆に行へば、假令絶對數において幾分劣勢であらうとも、敵の制空を壓倒し得るといふことも分つてゐるし、敵の戦法、敵の長所は、確實にこちらのものたらしめ得ることも分つてゐる。要は銃後の生産力だ。我が日本は、元來重工業的に彼等に劣つてはゐた。それは致し方ないんだ。「俺達は今、ありとあらゆる不利を忍んで時を稼いでゐるんだ」必ず銃後は、ラバウルさへ死守してをれば、立派にその任務を果して、間に合して呉れるんだ。「必ず近き將來に必要な飛行機と設營機械と舟艇が来るぞ」「大丈夫だ必ず来るぞ」と信じてゐるのだ。

「銃後ではいま必死になつて飛行機と小型舟艇を作つてくれてゐる、近い將來のある時期がくれば必ずこの趨勢を一舉に盛りかへし斷乎として敵を撃推出來るだけの數がくる、それさへくれば……」

と、本當に信じ切り、自信に満ちてゐるのだ。また過去一年半の間にソロモンの島々をいくつか涙を  
のんで撤退してきたが、いまこそ「背水の陣」の堅い覺悟である。ラバウルに私と同期の主計大尉がゐ  
るが、私が歸還する時、

「貴様も相當永くなつたのだから……」



てめ索を機敵に涙南

と、いふと憤然とした口  
調で、

「冗談いつちや困る。かう  
なつてからラバウルを離れ  
られるもんか、今の頰勢を  
すつかり挽回するまでは、  
俺はどんなことがあつても  
玉碎もしない。頑張つて頑  
張り抜くんのだ」

さういふ顔は本當に明る  
く、自信と決意に満ちてゐ

た。これが南太平洋第一線將兵全部の本當の氣持だ。ラバウルを守ることがすなはち我本土を鬼畜の米  
機から守ることだ、といふことをみな十分知つてゐるのだ。その覺悟によつて、眞に捨て身になつてゐ  
るからこそ、いかに熾烈、血みどろな毎日でも、いささかの強がりでもなしに氣持は本當に明るいのだ  
と思ふ。

「どんなことがあつてもラバウルは守り抜いてみせる。斷じてラバウルは死守する」

と、身内からほどばしる不動の信念に燃えて眞に明朗なのだ。その點私は内地へ歸つて、むしろ銃後  
の方が戦局に對する感じ方がじめじめと暗いのではないかと遺憾に思つた。それといふのも、まだまだ  
銃後には戦争に對して本當に必死でないものがあり、心構へに甘さと隙があるからではないだらうか。

### 精魂を盡して難局を突破せん

今や前線は銃後に最大の期待を懸けてゐるのに、未だに、戦争は兵隊だけのやるものであるかの如  
く、昔の錯覺に捉はれてゐはしないだらうか。「内地空襲は大丈夫だらうか」とか、「一體ソロモンは  
どうなるだらうか、ラバウルは持ち耐へるだらうか」等といふ質問を發する人がゐるのにがっかりさせ  
られる。むしろ前線が銃後に聞きたい位である。「三月になつたら何機造つてくれるのか」「何時まで

持ち耐へたら間に合はしてくれるのか」と、痛切な叫びが聴えないのだらうか。

前線では、内地をそんなに身近に感じてゐるのに、銃後はまだまだラバウルを遠い二千五百哩の彼方だと思つてゐるからだと考へる。銃後の人達は直接敵をみないから、感じ方が切實でないのは止むを得ない……といふが、前線でも一度も敵をみなくとも、なほ且つ背中にお盆のやうな田蟲が一杯出来るほどの暑いで黙々として戦ふ機關科の將兵がゐる。敵を直接みないといふ點で、銃後と機關科將兵も同様ではないだらうか。

とにかく、ラバウルの將兵は一日も早く、もつと多くの飛行機を待ち兼ねてゐる。そして近いうちに必ず銃後が造り送つてくれると信じ切つてゐるのだ。それさへ来てくれれば……と、確信に満ちて戦つてゐる。私が内地の海軍監理工場關係の配置に就くときいて、私の艦の士官以下一水兵までがみな異口同音にいつたのは、

「前線のこの實情を傳へて是非一日も早くより多くの飛行機と舟を作るやうにたのんで下さい」

といふ意味の言葉だつた。そして、前線で金を持つてゐても仕方がないから、この金で全國の工場を廻つて我々の氣持を話して貰へば……と、みんなで私に七百圓も餞別をくれた。小さな軍艦で七百圓といへば本當に大金なのだ。いくら斷つても駄目だつた。その眞情に私は秘かに泣かされた。そしていま銃後へ歸つて、私は前線の切なるあの願ひが、一日でも一刻でも早く達せられるやうに、銃後のみなさ

んと死身で頑張る覺悟を固めてゐる次第だ。

### 大西瀧治郎海軍中將 略歴

兵庫縣出身、明治四十五年海兵卒、大正二年海軍少尉任官、昭和十四年少將、十八年中將に異進。その間海軍航空本部教育部員、〇艦隊參謀、加賀副長、佐世保航空隊司令、横須賀航空隊教頭、航空本部教育部長を経て航空戰隊司令官、航空艦隊參謀長を歴任、昭和十六年三月航空本部總務部長、十八年十一月軍需省航空兵器總局總務局長に任ぜらる。

昭和十九年五月廿五日印刷  
昭和十九年五月三十日發行  
(初版五萬部)

「航空機増産」

定價二十五錢

出版者  
發行所  
印刷所  
印刷者

大阪市中區中之島三丁目三番地  
株式會社朝日新聞社  
山本榮  
大阪市中區中之島三丁目三番地  
株式會社朝日新聞社  
印刷所  
印刷者  
株式會社朝日新聞社  
印刷所  
印刷者  
株式會社朝日新聞社  
印刷所  
印刷者  
株式會社朝日新聞社  
印刷所  
印刷者

發行所

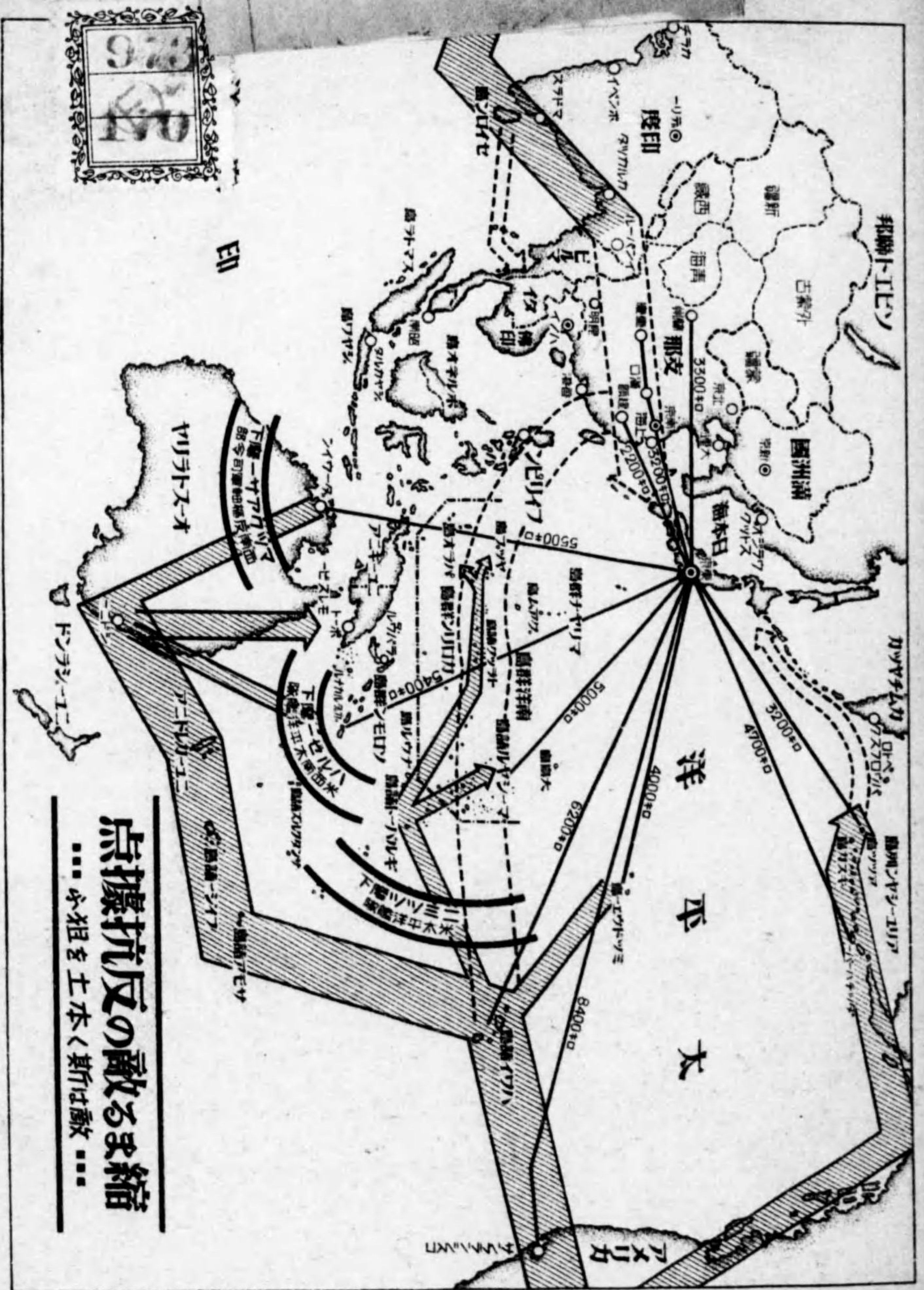
配給元

大阪市中區中之島三丁目三番地  
株式會社朝日新聞社  
東京都神田區淡路町二丁目九番地  
日本出版配給株式會社

「朝日時局新輯」既刊書目

- |                             |                          |
|-----------------------------|--------------------------|
| ① 朝日新聞 對日包圍陣之我々臨戰態勢 定價二十五錢  | ① 寺田 勤 勞務調整令の解説 定價三十錢    |
| ② 益田直彦 獨ソ戰の長期化とソ聯の抗戰力 定價二十錢 | ② 神原 泰 蘭印の石油資源 定價二十錢     |
| ③ 神川彦松 米國參戰問題 定價二十錢         | ③ 三好俊吉郎 南洋の樂園シヤロ 定價二十錢   |
| ④ 久門英夫 物價問題と國民生活 定價二十五錢     | ④ 大畑正吉 開拓農場法の解説 定價三十錢    |
| ⑤ 末松 清 世界動亂圖說 定價三十錢         | ⑤ 高山 毅 國民皆勤と勤勞報國隊 定價二十五錢 |
| ⑥ 奥野七郎 要約マイン・カンブ 定價二十錢      | ⑥ 大野勝巳 アメリカの對南米政策 定價二十五錢 |
| ⑦ 朝日新聞 戰時下の産業合理化 定價二十五錢     | ⑦ 谷口 卓 舊英領ホルネオ 定價二十錢     |
| ⑧ 室賀信夫 昭南島 定價二十錢            | ⑧ 朝日新聞 東亞部編 定價二十錢        |
| ⑨ 安藤一郎 ルーズヴェルト 定價二十五錢       | ⑨ 和田俊二 オーストラリア 定價二十錢     |
| ⑩ 太田正孝 戰時財政の増税 定價二十錢        | ⑩ 藤田武雄 南方經濟の建設 定價二十錢     |
| ⑪ 松下正壽 フォーリッシュ 定價二十五錢       | ⑪ 木村義吉 舊蘭領ホルネオ 定價二十錢     |
| ⑫ 久門英夫 變貌する日本産業 定價二十五錢      | ⑫ 島田 巽 最近の印度 定價二十五錢      |
| ⑬ 朝日新聞 大東亞戰爭展望(一) 定價二十錢     | ⑬ 福井慶三 印度の經濟と獨立運動 定價三十錢  |
| ⑭ 高垣金三郎 學年短縮と兵役 定價二十五錢      | ⑭ 細田秀造 南方の資源 定價二十錢       |
| ⑮ 杉本 健 太平洋海軍問題 定價三十錢        | ⑮ 藤生學志夫 南方圈のゴム資源 定價二十錢   |
| ⑯ 野村 宣 幣法の環境 定價二十錢          | ⑯ 小栗田 亮 アラスカ 定價二十錢       |
| ⑰ 藤田義光 防空法の解説 定價二十錢         | ⑰ 甲斐靜馬 決戰迫る歐洲戰局 定價二十錢    |





点據抗反の敵るま縮  
...ふ相を土本く斯は敵...

浅田常三郎  
朝日新聞社編  
圖奇近  
說製刊  
「イ  
ン兵  
」器

- |    |       |            |        |
|----|-------|------------|--------|
| 35 | 淺井得一  | 印度         | 定價二十錢  |
| 36 | 航空朝日編 | 米英軍用機      | 定價三十錢  |
| 37 | 朝日新聞  | 大東亞戦争展望(二) | 定價二十五錢 |
| 38 | 久住徳三  | 建國十周年の滿洲國  | 定價二十五錢 |
| 39 | 住田正一  | 世界戦争の船舶問題  | 定價二十錢  |
| 40 | 河崎圭一  | イ          | 定價二十錢  |
| 41 | 三宅貞夫  | 重慶の抗戦      | 定價二十五錢 |
| 42 | 三吉朋十  | 南方の衣食住     | 定價二十錢  |
| 43 | 一原有常  | ハ          | 定價二十錢  |
| 44 | 工藤敏郎  | 争奪線上のフリカ   | 定價二十錢  |
| 45 | 朝日新聞社 | ソ          | 定價二十錢  |
| 46 | 木田助太郎 | 北阿の新戦線     | 定價二十錢  |
| 47 | 天野芳太郎 | パナマ及びパナマ運河 | 定價二十五錢 |
| 48 | 朝日新聞  | 大東亞戦争展望(三) | 定價三十錢  |
| 49 | 芳賀 檀  | ドイツの戦時生活   | 定價二十錢  |
| 50 | 川島四郎  | 決戦下の日本糧食   | 定價二十五錢 |
| 51 | 和田俊二  | ニュージージーランド | 定價二十五錢 |
| 52 | 藤田義光  | 市町村制の改正    | 定價三十錢  |
| 53 | 久下勝次  | 空襲         | 定價二十五錢 |
| 54 | 中村政雄  | 北水         | 定價二十錢  |
| 55 | 朝日新聞  | 大東亞戦争展望(四) | 定價二十五錢 |
| 56 | 朝日新聞  | ニギヤ        | 定價二十錢  |
| 57 | 毛利秋俊  | アリユル       | 定價二十錢  |
| 58 | 前田義徳  | ト          | 定價二十五錢 |
| 59 | 土屋 清  | 企業整備の進路    | 定價二十五錢 |
| 60 | 朝日新聞  | 戦ふ國民政府     | 定價二十錢  |
| 61 | 浄法寺朝美 | 爆弾・焼夷弾・瓦斯弾 | 定價二十五錢 |
| 62 | 朝日新聞  | 太平洋諸島要圖    | 定價三十錢  |
| 63 | 工藤敏郎  | 米英の船舶抗戦    | 定價二十錢  |
| 64 | 浅田常三郎 | 空を護る科學     | 定價三十錢  |
| 65 | 栗原悦蔵  | 太平洋戦局と世界情勢 | 定價二十錢  |
| 66 | 朝日新聞  | 大東亞戦争展望(五) | 定價二十錢  |
| 67 | 鈴木武雄  | 朝鮮の決戦態勢    | 定價二十錢  |
| 68 | 宮崎小市  | 南進基地臺灣     | 定價二十錢  |
| 69 | 星野毅子  | 國土防衛と人口疎開  | 定價二十五錢 |
| 70 | 高橋源一  | 大軍需廠滿洲國    | 定價二十五錢 |

973  
170

終